

S M C 金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain S M C 豊島 健治

5月の金融・マーケット動向

金価格上昇

「金価格」が静かに上昇している。下表は昨年4月から直金に至る迄のニューヨーク及び東京での「金価格」推移である。

	NY金先物	東京金
2001.4.30	264.9 ドル	1,066 円
2001.7.31	267.9 ドル	1,093 円
2001.10.31	280.8 ドル	1,133 円
2002.1.31	282.9 ドル	1,238 円
2002.4.30	309.8 ドル	1,306 円
2002.5.29	326.2 ドル	1,329 円
上昇率	23.1%	24.6%

(金単位：NY・トロイオンス、東京・1g)

金は昨年2月を底に着実に切り上げている。この間9.11同時多発テロがあった。日本ではペイオフ一部解禁があった。今又、インド・パキスタン紛争やテロ再発懸念等の不安材料もある。そうした“事件・出来事”が人々の目を金に向けさせているのは間違いない。しかし、見方を変えれば、この1年のNY金市場の動きは金市場の長期的反転を示しているとも読めなくもない。

金は20年もの間下げ続けてきた。「インフレに強い金」も国際通貨市場・国際金融市場の拡大の前にかたなしだった。それが反転したとすれば、それは大きな変化である。それは利子所得を生む金融資産から利子所得を生まない実物資産への回帰を示すものであり、金融資産優位の終りの始まりを表しているのかもしれない。それは世界の政治や経済、あるいは通貨に対する不安の台頭をも意味する。問題は、このまま金がトレンドとして上昇を続けるか否かである。

それは誰にも判らない。しかし、予測されるシナリオの一つとして頭に入れておいて良いのではないかと考えている。

日銀、バランスシート拡大

日銀が今週発表した決算によると、3月末の総資産が138兆円に拡大している。前年比20%増も驚きだが、50兆円程度だった95年頃と比較すると3倍近く膨れ上がっている。経常利益は1兆4千億円と国庫にかなり貢献しているが、問題は拡大一途のバランスシートの中味である。

バランスシート拡大の最大要因は、実は国債である。前期末で何と86兆円強保有している。そ

れは、金融市場安定の名の元に巨額資金が投じられた結果である。今後も保有残高が増えて行くのは確実だ。日銀の中に将来の波瀾要因が毎年成長していると云っては言い過ぎか。

劣化する自己資本

大手銀行の3月決算が出揃った。それを元に日経新聞が独自試算した結果、大手銀行の自己資本比率は実質6.5%になったと報道した。このところ銀行の「自己資本の質」問題が取り沙汰されているが、米国並に厳格に計算したら公表値より4%程度低くなったというのだ。からくりは税効果会計にあった。

税効果会計についてここでは触れないが、大手銀行も中核的自己資本(一般企業で云う自己資本)が不足しているのは紛れもない事実である。将来戻ってくる(であろう)税金、返済順序の遅い劣後債務、あるいは投入された公的資金。そうしたものを自己資本にカウントしているのだからそう云われても仕方ない。

ノンバンクの中小企業攻勢

リース会社や信販会社等ノンバンクが中小企業向けローン事業を強化している。リコーリースや三洋電機クレジットがその代表格であるが、銀行にはない独自の審査システムを武器に貸出残高を拡大している。こうした挑戦が既存金融を刺激するところを期待する。

貸金庫、繁盛

今、銀行の中で最も需要があり人気のあるのが貸金庫らしい。貸金庫の増設をはかる銀行が相次いでいるようだ。

ご存知のように銀行はあらゆる所に手数料を設定し始めている。手数料収入の強化を進めているためだが、貸金庫増設はその一環である。その増設された貸金庫に、銀行に不信を抱いた顧客が現金を入れるアイロニーを銀行トップはどう思っているのだろうか。

銀行貸出残、減少止まらず

金融5業態(都銀、長信銀、信託銀、地銀、第2地銀)の貸出残高減少が止まらない。4月平残で429兆円と、過去ピーク(95年12月)より106兆円減った。毎月小規模地銀が1行ずつ消えている勘定になる。この流れはある意味で必然的な流れである。当分、減少は止まらない。その結果、金融再編も止まらない。